



Narashino International Association

SQUARE スクウェア

季刊会報

第 93 号

2011年3月1日

Narashino International Association (NIA)



平成 22 年度文化講演会

「火星に生命は存在するか：講師 千葉工業大学 後藤和久先生」

吉田 武 (交流文化部会)

昨年 11 月千葉工業大学で文化部主催の講演会が開催されました。テーマは「火星に生命は存在するか」
 講師は、千葉工業大学惑星探査センター主席研究員、後藤和久先生です。地球に残された何億何十億年前の地球の痕跡から太陽系の謎を明かすのは、世界の学者の夢です。しかし、地球にはもはや痕跡はなく、残るは小惑星です。先生のお話をきいていると、去年の大イベント小惑星ロケット「はやぶさ」を思い出しました。
 何しろ小惑星の物質を地球に持ち帰ったのは「月の石」以来世界で 2 番目の快挙なのですが、実はこの「はやぶさ」には、JAXA（はやぶさを打ち上げた研究機関）が素晴らしい企画を搭載したのをご存知ですか？
 普段拙い企画を考えている私には、眼からうろこでした。いわば「宇宙への置手紙」です。
 「はやぶさ」が小惑星イトカワに到達下降していく時、ソフトボール大の光るターゲットマーカーを落下させるのですが、これに名前を載せるキャンペーンを募集したのです。日本だけでなく、世界を対象に。題して「星の王子様に会いに行きませんか」これが大反響で、149 カ国 88 万人の応募があり、名前をエッチング加工し、着陸の光るマーカーとして使用するボールに巻きつけ、イトカワに送り込んだのです。「はやぶさ」が地球に帰還しても彼等の名前は永遠に宇宙への置手紙として生き続けるのです。
 もうこれからは、世界どころか、宇宙までも見据えて企画も考えなければならぬかと感嘆しました。今日もあの宇宙空間の静寂は、我々に何を語りかけているのでしょうか。

特集 “習志野の学校の国際交流活動について”

“習志野 ALT”

Gustave Hahn-Powell

習志野での仕事が始まって4ヶ月が経ちました。私はこの新生活をととても満喫しています。また、NIA が主催する毎週月曜日の英会話を楽しみにしています。



昨年は新しい体験の連続でした。体育祭、英語発表会、縄跳び大会や合唱コンクールを見たのは初めてでした。これらの行事は日本の中学校にあってアメリカにはありませんがその他にも、日本とアメリカでは興味深い違いがたくさんあります。中学校での勤務を通して私が気付いた、日本とアメリカの違いをいくつかご紹介したいと思います。

まずは制服です。アメリカの公立学校では、ある程度の服装規制はありますが制服は義務付けられていません。アメリカでは生徒一人ひとりの能力によって達成できたことが評価される一方、日本では皆の協力で成し遂げる事で高い評価を得る事ができるように思います。その考え方が制服の有無にも反映されているのではないのでしょうか。

学校の清掃への取り組み方でも、日本とアメリカでは違いがあります。

アメリカでは、生徒が学校内や教室を清掃する事はありません。自分の机やロッカーを各自できれいにする程度です。たまに悪い事をした生徒に罰として学校内の清掃を強要することはあります。日本では生徒が皆で学校を綺麗にすることで、協力することや彼らが学ぶ環境に対して責任を持つことが望まれているのかもしれませんが。学校で発生する管理費(清掃費用)の節約にも役立っているのでしょうか。

クラブ活動もまた、アメリカでは取り組み方が違います。アメリカでのクラブ活動は強制的ではなく趣味程度に行ないますが、日本では皆、真面目にクラブ活動に取り組んでいます。驚いたことは、日本の中学校では生徒が週末にもクラブ活動をしていることです。アメリカでは週末にクラブ活動があることはありません。日本の生徒はクラブ活動や塾で常に忙しく見えるので、もう少し休む時間が必要だと思います。一方で、アメリカの生徒はもう少し熱心に取り組んだら粘り強さが身につくと思います。

最後に、外国語教育についてです。アメリカの中学校では第二言語の学習が強要されていませんが、日本の中学校では、第二言語として英語の学習が義務付けられています。

他の言語を学ぶ事は、脳に刺激を与え、コミュニケーション能力を高め、異文化理解に役立ちます。政治的な立場や住む場所に関わらず、外国語を学ぶ事は非常に有益だと思います。

以上、私が感じた日本とアメリカの違いは、どちらの方が良くどちらが悪いということではありません。違いに気付くことは、文化、社会や価値観の違いを理解するのに役立っています。



“オーストラリア語学研修を終えて”

東邦大学付属東邦高等学校教諭 伊藤 智

2010年7月16日～31日まで、高校1年生43名がオーストラリア・ブリスベンでの語学研修に行ってきました。ブリスベンは、観光地として有名なケアンズの南に位置し、ゴールドコーストから車で1時間ほどのクイーンズランド州にある都市で、日本人の観光客も少ない落ち着いた雰囲気のきれいな町です。

16日夜成田を出発し、9時間の飛行で翌日午前7時過ぎに、ブリスベンに到着しました。日本との時差は、プラス1時間です。現地は南半球で冬のため、到着した時の気温は8度でした。しかし、日中は20度前後まで気温が上がり、半袖で過ごす人も見られました。冬でも朝晩を除くと、防寒着はほとんど必要のない感じでした。

一行は市内の観光をし、昼食後語学学校に向かい、そこでホストファミリーと対面し、緊張した面持ちで、1人ずつ別々の家庭へと向かいました。

週末をホストファミリーと過ごした後、月曜日から語学学校での授業が始まりました。家庭から学校までは車での送迎でした。登校した生徒達は、授業開始前の時間、卓球やサッカーをして過ごしていました。数日すると他の国の生徒とスポーツで交流する様子も見られました。午前中の授業は、8時半から10時まで、15分の休憩、10時15分から11時45分まででした。授業は、英語の読む・書く・聞く・話すという技能を総合的に高める内容でした。クラスには、東邦高校の生徒をはじめ、アジア系・ヨーロッパ系の生徒の姿も見られました。

午前の授業が終わると、生徒達はカフェテリアや芝生の上で家庭から持たせてくれた昼食をとりました。サンドイッチ・カップ麺・リンゴ・オレンジ・スナック菓子など様々なお弁当がありました。

午後は、東邦高校の生徒を中心に、アクティビティを行いました。第4日目の「市内観光」では、ブリスベ市内の名所を見学した後、クイーンストリートモールで自由行動となりました。

第5日目の「ローパインコアラ保護区」では、コアアラ・カンガルー・ウオンバットなどオーストラリア特有の動物に直接触れることもでき、生徒達は感

激していました。第6日目の「クイーンズランド大学見学」では、学生が伝統あるキャンパス内を英語で案内してくれました。海外の大学らしく構内は大変広く、静かで落ち着きのあるキャンパスでした。第8日目は、「ゴールドコースト」に行きました。ここは、日本人も多く訪れる有名な観光地で、遠くまで続く白い海岸の風景とショッピングを楽しみました。

第11日目には、現地の高校を訪問し、クリケットの試合を通して交流を深めました。語学学校最終日には、多くのホストファミリーが列席する中で、終了式が行われました。翌日、別れを惜しみながら帰国し、2週間の研修を終えました。

帰国後もホストファミリーや外国の友人と連絡を取り続けている生徒もおります。異文化を直接体験することで、日本の文化を客観的にとらえ、将来異文化間の交流に進んで貢献できる人物が出てきて欲しいと願っております。



“ブリスベンでの2週間”

東邦大学付属東邦高等学校1年 池田ひとみ

私は今年の夏に学校の行事であるオーストラリアのブリスベンでの2週間の語学研修に参加しました。これから、その2週間で経験したことを述べていきたいと思います。

平日は英語を勉強するために学校へ行き、午前中に授業を受けました。授業は、いつも日本で受けている授業とは違い、主に英語を話すことを中心に進められました。また、私がいたクラスの先生は曜日によって2人で交代して教えて下さったので、飽きることなく授業を受けることができました。特に、他のクラスと一緒にちょっとしたゲーム等をしたのが楽しかったです。そして、午後には様々なアクティビティーをしました。どのアクティビティーも楽しく過ごす事が出来ましたが、特に印象に残っていることは、ローパインコアラ保護区でカンガルーに餌やりをしたり、日本の動物園では見られないような動物を間近で見ることができたということです。敷地が広くて全ての動物を見られなかったのですが、私は動物たちによって癒されました。とても居心地が良かったです。



週末は、私が2週間ホームステイさせてもらった家族と過ごしました。その家族は Karenさんと彼女の息子である Kenji の2人家族でした。最初の週末は、私がオーストラリアに到着したばかりだったので、ブリスベンの中心地まで連れて行ってもらいました。中心地へ行くためにフェリーに乗せてもらったり、一緒に川の上にある栈橋のような道を散

歩したり、また偶然にも Kenji のお友達に会ったりしました。

その日は天気も良かったので、ずっと過ごしていたと思うほど、気持ち良かったです。



次の週末には、Karenさんが教えているヨガの教室に行ってヨガをさせてもらったり、彼女のお友達のパーティーに連れて行ってもらったり、Kenjiのお友達も一緒に公園で遊んだりしました。パーティーでは色々な人が親切に私に話しかけてくれたので、英語を沢山話す良い経験ができたと思います。また、公園で Kenji たちとおもちゃの銃で遊んだのが、意外と楽しかったのであつという間に時間が過ぎてしまいました。

そして、楽しい時間はどんどん過ぎてゆき、とうとう日本に帰る前日、お世話になった2人にお礼の手紙を渡しました。すると、Kenji がすぐに返事のお手紙を書いて渡してくれました。可愛らしいカンガルーのイラストとともに私よりも沢山のメッセージを書いてくれました。私はその時感動し、この家族と2週間過ごすことができ本当に良かったと思いました。今でも、感謝の気持ちでいっぱいです。また、ブリスベンを訪れることがあれば、ぜひ会いたいと思っています。

この夢のような2週間のオーストラリアでの生活は、わたしにとって充実したものでした。英語の勉強の大切さだけでなく、人とのかかわりの大切さを改めて実感しました。今度は私の家に外国人を招いてホームステイをしてもらいたいと思います。

皆さんも是非一度ホームステイしてみたいかかでしょうか。

“私の宝物”

東邦大学付属東邦高等学校1年 河野 凜紗



日本が夏真っ盛りの7月、私たちは冬のオーストラリアへ飛び立ちました。全てが初めてだった私は、複雑な気持ちでその日を迎えました。

ホストファミリーと初めて会ったとき、人見知りの私は緊張で話せませんでした。でもホストマザーは私に優しく、ゆっくりと話しかけてくれました。そして私が話し出すと目を見て真剣に耳を傾けてくれました。こんなに私の話を真剣に聞いてくれる人は今までいませんでした。

ホストファミリーがそんなに心を開いてくれたのに、その時の私は心を開くことができませんでした。「自分の英語なんて通じないに決まっている」と決めつけて、必要最小限の会話だけにしようとしていました。きっとそのままホームステイを終えていたら、いい思い出はできなかつたと思います。

「自分から心を開かなければ、通じることも通じなくなる」と気付いたのは3日目でした。私は今まで自分から壁を作っていたことを恥ずかしく思いました。そして「今日からでも遅くない、がんばって話しかけてみよう」と強く思いました。用事がなくてもなるべくリビングにいて、分からないことは自分から質問しました。ちょっと行動を変えるだけで、こんなにも楽しくなるのかと思いました。

まずホストファミリーにいた2歳の女の子が私に懐いてくれました。私の後ろを追いかけてきて、手をつないだり、抱っこしたりとずっと一緒にいるようになりました。自然と笑顔でいる時間が増え、毎日が楽しくなりました。

楽しい時間はすぐに過ぎてゆき、気づくとお別れの日でした。私は悲しくて、涙がこぼれそうでした。別れ際にホストマザーが「あなたは私たちの家族だからいつでも帰ってきていいのよ。待っているから。」と言ってくれました。私はとても嬉しかったです。今度は嬉しくて涙がこぼれそうでした。2歳の女の子も「私のお姉ちゃん！どこに行くの？」と繰り返していました。そして私はホストファミリーと抱き合っ、別れました。



日本に帰り、空港で両親を見つけたとき、私は安心して泣き出してしまいました。でも私は泣きながらも「楽しかったよ。行ってよかったよ。」と繰り返しました。これは本当のことで、私が何よりも両親に伝えたかったことでした。

家に帰ってパソコンを開くと、ホストマザーからメールが届いていました。「無事に帰れた？娘はずっとあなたを呼び続け、探しています。」と。私は無事に帰れたことと、感謝の気持ちをメールにこめて返信しました。

その後5カ月たった今でも、連絡を取り合っています。誕生日やクリスマスにはプレゼントを贈り合い、電話をかけます。現地で出会った韓国人の友達ともメールをしています。もちろん連絡は英語ですが、楽しくて英語まで好きになってしまいました。

ホストファミリーも友達もたった2週間しか一緒に過ごせませんでした。これからも連絡を取り続けたいと思います。私にとってこの「縁」は一生の宝物です。

“ 習志野市立習志野高等学校の 国際交流活動 ”

習志野市立習志野高等学校教諭 水島真一郎

習志野市立習志野高等学校では、英語科職員を主体とした国際交流委員会が中心となり、主に次のような国際交流活動を展開しています。

1. タスカルーサでの語学研修

毎年7月に約3週間希望者を募り、午前中はアラバマ大学の語学研修所(ELI)で学び、午後は姉妹都市委員会が準備してくださるエクスカージョンやアクティビティーに参加しながら、語学学習のみでなく現地での生活様式も存分に体験できるプログラムです。平成22年度はELIでは一般の留学生(世界各地から集まった生徒)とともに授業に参加することができ、大いに刺激を受けることができました。また、滞在期間中の宿泊はすべて現地の家庭でホームステイをさせていただき、現地の生活を直接体験できる機会が与えられ、生徒たちは非常に多くのことを学ぶことができました。



2. タスカルーサとのスポーツ・文化交流

以前から本校吹奏楽部が何度かタスカルーサへの演奏旅行を実施していたものを、本校の特色であるスポーツにも広げていこうというプログラムです。

平成20年7月には本校サッカー部22名が約10日間の日程で現地に赴きました。期間中は親善試合や現地のコーチたちからの技術指導などを受けるとともに、アラバマ大学などのスポーツ施設の見学やプロ野球観戦など、アメリカのスポーツ事情を視察する機会にも恵まれたので、海外で試合する難しさや楽しさ、スポーツを通じて外国の人々と交流することの素晴らしさなど、多くのことが体験でき、生徒たちにとって非常に貴重な経験となりました。



3. タスカルーサからの留学生の学校訪問

隔年で来日する高校生が本校で一日日本の高校生生活を体験し、習志野高校の生徒と交流を図るプログラムです。午前中は全校生徒参加での歓迎会、英語の授業への参加、有志生徒との書道体験、午後は茶道部による茶道体験、有志生徒とのフリー・トーク、部活動見学などとヴァリエティに富んだ内容でおもてなしいたします。



4. アジア総合学科

幕張にあるアジア経済研究所で学ぶアジアの国々からの留学生たちによる出張授業です。毎年3学期に行います。主にその方々の出身国の文化や習慣などを、パワーポイントの映像を交えながら説明していただきます。授業はすべて英語で行われます。欧米が中心になりがちな国際交流ですが、近隣のアジアの国々をよりよく、より正しく知るプログラムです。



“千葉工業大学の国際交流活動”

千葉工業大学国際交流課長 小出範雄



千葉工業大学は1942年に設立された、工科系単科大学としては我が国で最も歴史と伝統を有する大学です。工学部、情報科学部、社会システム科学部の3学部11学科、大学院3研究科9専攻を有し、1万人近くの学生が、この習志野の地で勉学に励んでいます。校舎は学部の1・2年生が学ぶ芝園校舎と、3・4年生と大学院生が学ぶ津田沼校舎に分かれており、2012年の創立70周年に向けてキャンパス再開発計画が着々と進行しています。

建学の精神は「師弟同行」、「自学自律」。きめ細かい指導体制のもとで、創造性豊かな人材の育成を目指しており、国際交流にも積極的に取り組んでいます。海外からの留学生は現在60名あまり、主に中国や韓国などアジア圏からの留学生です。また、4～6ヶ月の短期留学では、毎年フランスのコンピエーニュ工科大学から4名程度の留学生を受入れており、彼らは本学の大学院生とともに研究に励みながら、日本のキャンパスライフを楽しんでいます。

現在本学では中国、アメリカ、カナダ、フランスなど6カ国11大学と交流協定を締結し、学術交流団や学生団の相互派遣、短期交換留学や語学研修プログラムなどを通じて、国際的に活躍できる技術者・研究者の育成を目指しています。

【留学体験談】

○生命環境科学専攻 岡田美鈴さん

(カナダ トロント大学に留学)

留学のきっかけは、海外の自分の知らない人やもので溢れた魅力ある世界を知りたいと思ったからで

す。トロント大学では、世界の著名な教授や研究者の講演を毎週受講できます。私の研究テーマである遺伝子工学をはじめ、地球環境や宇宙などサイエンスに関わる多彩な授業に参加でき、最先端の知識や技術を学ぶ楽しさを大いに体験できました。



留学先の仲間たちはみんなポジティブで失敗を恐れず、自分の成長のためには努力を惜しみません。何事にも主体性を持って行動する姿勢は、私よりも刺激され、感動した点です。今後も世界の人々の役に立つ成果を目指し研究に励みたいです。

○建築都市環境学専攻 中村周平さん

(アメリカ ペンシルバニア州立大学に留学)

今回の留学で最大の幸運は、世界的な環境建築家であり哲学者の James Wines 氏との出会いです。氏からの直接のアドバイスは、私の建築への視野を広げ、建築家への大きな夢を与えてくれました。

私のテーマは、いかに建築とランドスケープが統合できるかというもの。留学先では、建築を含むすべての要素が相互に結びつきエコロジカルなサイクルを形成するパーマカルチャーの概念を学び、自分の集大成となる作品を完成させる大きな力になりました。建築は芸術的表現への欲求を満たし、同時に社会的貢献を果たすことができる職業です。今回の留学で、グローバルな視野を持った建築家になりたいという決意がより強くなりました。



クリスチャン君の母親、シュミッツ夫人から皆さまへのお礼状です。(今井 洋子)

This morning when I came home to take a shower, Christian went to be with Jesus. He is out of pain and into glory. He allowed Caleb to be in charge in the end and take care of us. These have been special hours.

We will have a private burial time with just us. His celebration will be at NBC on Sunday at 2. All are invited. Come in singing hymns. We will have a time of rejoicing to share his vision. We are asking for no flowers, you've been plenty good to us. We ask that you give your donations to your favorite missions organization, the Christian Schmidt Scholarship fund through our church, or Hospice of West Alabama.

We thank you for walking this journey with us. We have been blessed by you.

Love, Schmidts

今朝(2010年11月2日7時30分)私がシャワーを浴びに家に帰って来た時、クリスチャンは神の元へと旅たちました。彼は痛みから解放され、今天国にいます。最後に彼は私達のことも含めてカレブにすべてを任せました。特別な一時でした。

身内だけで埋葬します。彼を称える会は日曜日の2時からNBCで行います。皆さん、いらして下さい、賛美歌を歌いながら。彼のビジョンを分かち合い祝いましょう。皆さんにはもう十分して頂きましたので、お花は遠慮します。寄付はお好きな伝道事業や、私達の教会を通じてクリスチャンシュミッツ奨学資金、あるいは西アラバマホスピスへして下さいようお願い致します。

この道程を私達と一緒に歩んで下さり感謝致します。皆様のお陰で恵まれていました。

愛をこめて。シュミッツ

(翻訳 老山 節子)

〈 訃 報 〉

元アラバマ大学教授のマリリン・アンブランクール博士が昨年12月20日に逝去されました。

マリリンはタスカルーサ姉妹都市委員会やアラバマ日米協会(Japan America Society of Alabama)創設メンバーの一人として、習志野市やアラバマ在住の日本人のために長期にわたり尽力されました。習志野市には姉妹都市提携時を初めとして、たびたび訪れています。アラバマ大学のインターナショナルプログラムにも長く携わり、タスカルーサから習志野市に派遣されるALTの人選や、千葉大学にもアラバマ大学の卒業生から奨学生を何人も派遣しています。

習志野市からタスカルーサを訪れた高校生や訪問団の受け入れにもかわわり、サザン・ホスピタリティーで暖かくもてなされた習志野市民は数知れません。

闘病中も穏やかに過ごされ、亡くなる数日前まで習志野の友人たちのことを想っていたと伺っています。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(姉妹都市部会長 日向洋美)



“第3回ふれあい祭のお知らせ”

習志野市国際交流協会主催の International Festival『世界をつなぐふれあいと遊び』を下記により開催します。NIA 会員皆さんの参加をお待ちしています。

記

日時 平成23年3月20日 AM10:00 ~ PM3:30

場所 津田沼小学校体育館

京成津田沼駅より徒歩10分

催物 アフリカンドラム、民族衣装パレード他の各種イベントが予定されております。

また、ビンゴゲーム他の遊びもあります。お子様連れでどうぞお越し下さい。

持参 上靴、スリッパをご持参下さい。

スクウェア 第93号

発行 2011年3月1日

習志野市国際交流協会

発行責任者 崎山 征雄

編集責任者 高山 進三郎

〒275-0016

千葉県習志野市津田沼5-12-12

サンロード津田沼4F

TEL/FAX 047-452-2650

<http://www.nia08.com/>

(Eメール) nia@seaple.ne.jp